

平成28年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文  
高等学校の部 最優秀賞



## ミール城は知っている

福島県立小高商業高等学校  
2年 大川 蘭子

「クラシーバ イポーニア」

ベラルーシ・ミンスクの世界遺産ミール城の前に立ったとき、ふと私は何故ここにいるのだろうかと考えた。奇妙な感覚だった。

東日本大震災が起こったとき、私は小学5年生だった。松川浦の自宅は津波で全壊。道路にはあちこちに漁船がころがり、見慣れた街の風景は、見るのが辛くて苦しいものへと一変してしまった。

我が家は祖父の代から漁業船舶電機業を営んでおり、近所には漁業で生計を立てている家もたくさんあった。大地震の直後、漁師は津波の衝撃から自分の船を守るために、命がけで出港し、沖へ沖へと船を移動させている。父はその時消防団活動をしていたのだが、沖へ出た知り合いの漁師から「津波の第一波が行くぞ」という無線連絡を受ける。沖では大きな漁船がまるで木の葉のように波に翻弄されながら、命がけで陸上の父に第二、第三の津波情報を送ってくれたそうだ。

のちに、松川浦大橋の下を一行になつて沖へ出て行く船の写真を見た。家族を陸に残して、船を守るために荒れ狂った沖へ出て行く漁師の心情はいかばかりだったのだろうか。私には、災害が起きても船があれば生活が再建できる、という漁師魂の表れだと感じられ胸が熱くなった。ところが、その魂の行動は裏切られることになる。放射能による汚染が、すぐにはもどれない街を生み出すことになったのだ。

その当時の私には、今何が起きているのかを理解する力は十分ではなかったと思う。中学時代は仮設住宅や災害公営住宅で過ごし、街が少しずつきれいに整っていくのを見て、うれしく思うこともあった。しかし父の仕事や漁港の復興への努力は、拡大する風評被害になすすべがなかった。福島の漁業の現実が重苦しいものになっていくのが、中学生の私にもわかった。

高校生になり、私は高校そのものが避難を余儀なくされている小高商業高校のサテライト校に通うようになった。電車で片道20km。より広い地域が視野に入ってきたせいか、帰還困難地域、居住制限区域、避難指示解除準備区域の言葉の違いを考えたりしながら、列車の窓から景色を眺めた。それまでの生活では気づかなかったたくさんの現実が見え始めてきたように思った。

高2になって、JR常磐線小高駅の復旧状態視察のため来福された安倍晋三総理と懇談の機会を与えられ、その際「地域の復興や活性化に貢献していきたい」「困っている人た

ちに手をさしのべてあげたい」と伝えることができたが、自分でも実際には何をどうしたらいいのか、気持ちがあまらせずに戸惑っていたのをおぼえている。

そんな時、日本ベラルーシ友好派遣団の話聞いた。ベラルーシは30年前のチェルノブイリ原発事故のあと、復興に尽力した国と聞いていたので、これからの自分の指標にもなるかなと思い、参加したいと手をあげた。

ベラルーシに着いて3日目、国立子ども教育保養センター「ズブリョノク」に入った。ここは世界中から学生が研修を受けに来る場所で、さまざまな国の人たちが交わすあいさつやハグが印象的だった。私は日本から来た他の高校生と一緒に、ロシアの言葉や歴史を学んだり、時には近くの池でボートを漕いだりと、メリハリのあるプログラムを楽しんでいた。そして、ベラルーシ滞在中で一番感銘を受けた、ホイニキ地区の研修を受けることになる。

ホイニキ地区はゴメリ州の中でも汚染度が高かったため、事故後の生活がたいへん厳しかったエリアだ。現在も食品の放射能を測定しており、森で採れるキノコやベリーから、今でも放射能の値が検出されることがある。その研修の最後に、担当のベラルーシの方が言われた言葉を、私は忘れることができない。「私が、一度は誰もいなくなったゴメリ州に戻ってきたいと思った理由は、環境が整ったこともあります、やはり生まれた土地に戻りたかったし、なんといってもこの場所が大好きだからなのです」

静かに言い切ったその言葉に、私は雷に打たれたような衝撃を受けた。そうだ、私はこの言葉を聞きたくてここに来たのかもしれない。そうだ、私たちはふるさとが大好き。ふるさとの海や山が好き。だから、たくさんものを学んで力にするんだと心の中で叫んでいた。

ホイニキの研修の数日前、ミール城の前に立ったとき、少し不思議な感覚に襲われたことを思い出した。—何故ここに立っているのか—

たくさんの涙を流し、たくさんのものを失ったが、一連の震災と原発事故がなければ、今、私はここには、いない。自分の内側の何かがガラッと動いた。チェルノブイリの事故を見ていたミール城は500年以上の歴史があり、たった30年のこの国の急激な変化を微動だにせず受け止めている。もしかしたら、ミール城は私の中の何かを知っているのではないかと。本当に奇妙な感覚だったが、確かだと言えることは、ベラルーシの国民が楽しそうに集うランドマーク的存在のミール城を見たときの私に、今ある環境で一生懸命生きて地域の復興の力になりたいと強く湧き上がってきたこの思いだった。

ズブリョノクで案内してくれた大学生のガイドさんに、富士山の写真をあげたとき、ロシア語で「クラシーバ イポーニア」(美しい日本)ととても喜んでくれた。美しい、日本。そして美しい、ふるさと。この若いロシアの学生の言葉は、美しい福島復興再生が、私たちの世代に任せられていることを気づかせてくれた。ずっと浜通りの劇的な変化を日々この目で見てきた私たちが、未来をつくっていくのだということが、真実であることを。

日本で見つけることができなかった、私にとっての「これから」が、ベラルーシで一つ見つかったように今は思える。外から日本・福島を見ることによって、本当に自分のふるさととしての被害地域をどうするか、初めて正面から向き合えた気分だ。これから私の考えはどんどん変わっていくだろうし、私がどのような人生を歩むのか、正直よくわからない。しかし、国内外を問わず、逆境の中で人間は連帯できることを実感した私は、これから自分がどのような人生を歩むのか楽しみでならない。どんな自分になるにせよ、いつかまた、ミンスクに500年の時を超えて立ち続けるミール城を、また見にいきたいと考えている。